



水^{ひろしま}道物語

はじめに

水道は、ただの管や施設の集合体ではありません。

そこには、それぞれの地域で長い年月をかけて築かれてきた水にまつわる歴史と文化が息づいています。

その「唯一無二」の物語を丁寧に語り継いでいくことこそが、水道をかけがえのない地域の財産として育み、次世代へと継承していくことにつながるものと考えています。こうした考えの下、この度「ひろしま水道物語」を作成しました。

目 次

第1章 戦前

- 1 黎明期 水を求めた暮らし…………… 1
- 2 創設期 近代水道のはじまり…………… 3
- 3 拡張期（明治から昭和初期）
都市の成長を支える水道…………… 7
- 4 原爆と広島市の水道 届け「命の水」…………… 9

第2章 戦後から現在

- 1 復興と拡張期（昭和から平成）
高度経済成長と都市の発展を支える水道…………… 1 2
- 2 安定給水への取組
市域の発展と渇水への対応…………… 1 6
- 3 水道事業を取り巻く環境の変化
頻発する災害と老朽化への対応…………… 1 8

第3章 「持続」に向けて未来へ紡ぐ水道物語…………… 2 1

参考文献…………… 2 4

第1章 戦前

1 黎明期 ～水を求めた暮らし～

「母なる川・^{*1}太田川」は、西中国山地に源を発し、大小72の支流を集めながら103kmを蛇行し、広島^{*2}のデルタ地帯に潤いを与えてきました。この豊かな水は、広島の人々の暮らしと深く結びついています。

デルタのまち広島では、井戸を掘っても塩水が出る事が多く、良質な地下水に恵まれていませんでした。そのため、多くの人々は太田川から水を汲んで生活をしていました。水汲みは水場と自宅を何度も往復する重労働で、主に女性や子どもたちが担っていました。

また、江戸時代には「水売り」が桶を担いで太田川の水を売り歩いており、良質な水を湛える太田川は人々の生活に欠かせない存在となっていました。

しかし、雨が降ると水は濁り、水害が起こると、飲料水に困ることもしばしばありました。

さらに、明治時代に入ると、海外との交易や戦争によりコレラや赤痢などの伝染病が持ち込まれ、人や水を介して広島にも広がり、大火や水



水汲みの様子



水売り

害も頻発していたため、清潔で安定した水の供給が求められるようになりました。水道の創設は人々の切なる願いとなっていったのです。



猛威を振るった
コレラ退治の錦絵

注釈

- *1 太田川 広島県を流れる一級河川で、広島市の主な水源です。廿日市の冠山を源流とし、柴木川、筒賀川、滝山川等72の河川と合流した後、市内では、太田川放水路、京橋川、猿猴川、天満川、元安川に分流し広島湾に到達します。延長は103 kmです。
- *2 デルタ地帯 河口付近において、河川によって運ばれた土砂等が堆積することで形成される地形です。広島の市街地にあたる太田川の下流域は、ほとんどが海中でしたが、太田川に運ばれた土砂が堆積し砂州や自然堰堤ができ、しだいにデルタが形成されていきました。

2 創設期 ～近代水道のはじまり～

明治27年（1894年）に日清戦争が勃発すると、広島市には^{*3}大本営が置かれ、軍事・政治の中心地となり、多くの人々が集まりました。その結果、市の人口増加と衛生環境の悪化に伴い水道創設の要望が一層高まっています。

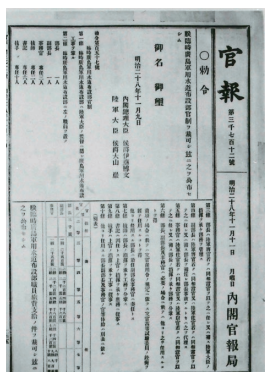


広島市に置かれた
臨時帝国議会仮議事堂

その翌年、明治28年（1895年）11月には、明治天皇によって「広島軍用水道に関する^{*4}勅令」が公布されました。これは帝国議会の承認を必要とせず水道の創設を可能とする極めて異例な措置でした。この背景には、当時の内閣総理大臣・伊藤博文と陸軍中将・児玉源太郎の強い推挙があったとされ、その思いが次の言葉に込められています。

伊藤博文は「深仁厚澤（しんじんこうたく）」と詠み、「この水道は、明治天皇の深い恵みによって創設され、大自然の果てしない水の徳を市民に与えている」と述べています。

また、児玉源太郎は「不舍晝夜（ちゅうやをおかず）」と詠み、



勅令を報じる官報

「広島のみである太田川は昼夜を問わず流れ続け、その恵みを市民に与えている」と述べています。

この言葉が刻まれた石額は、現在も^{*5}広島市水道資料館に展示されており、先人達の思いを今もなお、静かに

語りかけています。



広島市水道資料館

広島市の水道は、軍用水道と市民用水道の接続を前提とした一体的な設計がなされていました。そして、明治29年(1896年)5月には、^{*6}軍用水道とこ

れに接続する市民用水道の工事が始まり、明治31年(1898年)8月25日に完成し、全国で5番目となる近代水道が広島市に誕生しました。^{*7}その後、同年11月1日に、軍用水道は広島市に無償貸与され、広島市が水道事業として運用することになりました。

当時の計画給水人口は、市民人口9万人に軍関係者の3万人を加えた、計12万人とされています。

多くの人々が待ち望んだ水道の創設によって、衛生状態はしだいに改善されていきました。とりわけ、コレラは汚染された飲料水を介して爆発的に流行するため、安全な水道の普及によって著しく減少しまし



牛田水源地で行われた通水式



創設当時の牛田水源地
(現・牛田浄水場)

た。さらに、大正期には水道水への^{*8}塩素消毒を開始したことで、コレラの発生は一層減少し、乳児の死亡数も減少していきました。

また、水汲みの必要がなくなったことで、女性や子どもたちの負担が軽減され

ました。この結果、女性は紡績工場への就労など社会参加の機会が徐々に進むとともに、子どもたちへの教育の機会が広がっていきました。

ただし、当時の水道は最初からすべての家庭に蛇口があったわけではなく、共用栓と呼ばれるひとつの蛇口を複数世帯で使用していました。共用栓の真鍮の蛇口が朝日にきらりと光り、そこに人が集まる。水を使うことが人をつなぎ、声を交わし、助け合う場となり、井戸端のような場となっていったのです。

現在では、各家庭に蛇口があるのは当たり前ですが、その蛇口が紡いできた人と人とのつながりは、まちの成長とともに強まり、広島市の水道はまちづくりの重要な礎として人々の暮らしを支えていきました。

注釈

*3 大本営 戦争時の軍の最高統帥機関で、日清戦争時に広島市に設置されました。

*4 勅令 天皇による命令の一種で、帝国議会の承認を必要としません。

- *5 広島市水道資料館 大正13年に建築された送水ポンプ室を改修した建物で、爆心地から2.8kmの位置にあたる牛田浄水場内に所在します。広島市の水道や歴史を学ぶことができ、被爆建物に登録されています。
- *6 軍用水道 日清、日露戦争の戦時下に、主に軍事施設や軍関係者へ給水するために布設された水道で、広島市や呉市（呉鎮守府）、横須賀海軍工廠などがあります。
- *7 軍用水道と市民用水道の創設と接続の経緯
当初、広島市自らが国に対し水道布設の申請を出しますが却下されたため、日清戦争の戦費を原資に、軍が主導して整備する方式が採用されました。明治28年（1895年）11月には「臨時広島軍用水道布設部官制」なる勅令が公布され、例外的な国の事業として進められ、軍用水道の整備が明治29年（1896年）5月に着工されると同時に、市民用水道の工程も並行して進行しました。そして、明治31年（1898年）8月12日に軍用水道と市民用水道がいずれも竣工し、同月25日に盛大な通水式が牛田水源地（現・牛田浄水場）で実施されました。この式典は、軍用水道としての通水式と同時に、市の水道創設を祝う記念日ともなりました。通水式の後、軍用水道は広島市に貸与され、市が管理・運営を担う形になりました。その後、軍用水道は、昭和27年（1952年）に国から広島市へ無償譲渡されました。
- *8 塩素消毒 昭和32年（1957年）に制定された、水道法に定められている水道水の殺菌方法で、飲用水を安全に届けるための処理です。明治23年（1890年）に公布された水道条例には取り決めがありませんでしたが、広島市は大正14年（1925年）から塩素消毒を開始しています。

3 拡張期（明治から昭和初期）

～都市の成長を支える水道～

我が国は近代水道の完成後、急速に近代国家として発展を遂げ、広島市も人口の増加に伴って市街地が拡大していきました。

明治37年（1904年）に日露戦争が始まると、広島市は軍事的要衝としての地位を更に高め、*⁹兵站基地・集結地としての役割を担うようになります。

このような背景から、広島駅から*¹⁰宇品港（現・広島港）までを結ぶ*¹¹宇品線が整備され、宇品港では連日、兵士や物資を積んだ軍用列車や船舶が発着していました。駅のホームには汽笛の音が響き渡り、車輪の軋む音とともに、見送りのざわめきがこだましていました。

一方、市中心部の中島町、紙屋町、八丁堀周辺では、兵士やその家族、軍関係者らが行き交い、かつてないほどの賑わいを見せていました。戦時体制下ならではの緊張感と活気が交錯する中、下宿、旅館、料亭、飲食店などが多数開業しました。通りでは、打ち水の音が涼を呼び、喫茶店や料理屋の賑わいが聞こえるなど、軍都・広島を象徴するような繁華街が形成され、水の使用量もしだいに増加していきました。

さらに、大正元年（1912年）には広島電気軌道鉄道株式会社（現・広島電鉄）が路面電車の運行を開始し、市内への交通の利便性が向上します。これにより、郊外から市街地への通勤・通学の流れも生まれ始めました。

こうした都市の成長に伴う水需要の増加に対応するため、広島市では明治40年（1907年）から昭和10年（1935年）にかけて、3期にわたる水道の拡張工事を実施しました。

また、昭和初期には近隣町村との合併が進み、昭和4年（1929年）には市の人口が26万人に達します。

加えて、軍用船への給水や工場の進出、官公庁の整備などによって都市機能が拡充され、水の需要は更に増加していきました。



明治40年（1907年）
牛田濾過池の築造工事



創設期の配水管布設



明治40年（1907年）
牛田配水池の築造工事



昭和10年（1935年）
己斐調整場ポンプ室

その結果、計画期間を昭和16年（1941年）から昭和23年（1948年）とし、計画給水人口を64万6千人とする第4期拡張事業を開始しました。

広島市の水道は、まちの発展に伴い創設から大きく拡張してきましたが、これは市民の平和な暮らしを支えることを目的に取り組んできたものです。こうした中、その発展を一瞬で打ち砕く出来事が昭和20年（1945年）8月6日の朝に起こります。

注釈

*9 兵站基地 軍の行動を支えるための物資補給や整備、輸送、保管を行う拠点です。

*10 宇品港 現在の広島港で、明治22年(1889年)に開港し、戦時中は兵士や物資の輸送拠点となりました。

*11 宇品線 広島駅と宇品港の5.9kmを結ぶ鉄道で、明治27年（1894年）に完成し、戦時中の物資・兵士の輸送に利用されました。（現在は廃線）

4 原爆と広島市の水道 ～届け「命の水」～

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分、人類史上初の原子爆弾が広島市に投下され、街は一瞬にして廃墟と化しました。

爆心地からわずか500mに位置していた基町の水道部庁舎は壊滅し、出勤していた職員全員の命が奪われました。このため、当日の庁舎内の実相を知る人は誰ひとりとしていません。また、爆心地から2.8km北に

あった^{*12}牛田水源地も爆風により破壊され、電源系統とポンプの送水機能が失われました。水道管の大半も破損し、漏水率は80%に達しました。

このままでは市内への給水は途絶えるところでしたが、当日非番だった堀野九郎技手が被爆による火傷の痛みにも耐えながら水源地に駆けつけ、内燃機に直結した予備の送水ポンプを応急修理し、市民への送水を再開しました。そして他の職員たちと協力しながら、「命の水」を送り続けました。

それでも、水は壊れた水道管から漏れ続けており、市内全域に十分な水を届けるには至りませんでした。全市民的な断水は回避することができました。

被爆により、水道部では186人の職員のうち83人が命を失い、人手も物資も不足する中で、職員たちは漏水修理に全力を尽くし、翌年4月には応急修理を終え、市内の広範囲に水が行き渡るようになりました。

広島市の水道は、原子爆弾という未曾有の災禍の中でも完全な断水を免れ、多くの人の命をつなぎ続けました。この出来事は「^{*13}不断水の歴史」として、今なお広島市水道局の職員たちに受け継がれ、誇りとなっています。



壊滅した
水道部庁舎

当時の広島市の水を言葉で紡いだ人物がいます。詩人「^{*14}みやち治美さん」が詠んだ詩「水道」です。この作品は、平成8年（1996年）にアメリカ国立図書館主催のコンテストで編集長賞を受賞しました。

1945年8月6日 日陰さえ消し去られた広島街に
赤児をも焼き尽くした 神も目を覆う地を黒く染めて
水道水は飛び散る あの時
すぐ牛田浄水場に駆けつけた非番の男たち
ポンプは人力で動かし
辛うじて即死を免れた市民の渴きを助けた
水を飲むとやけ爛れた皮膚はふくれ はじけ捲れ
息絶えた ひと ひと ひと 力尽きても交替で
ポンプを動かし続けた職員たち 水は送りつづけられ
壊れた水道管から したたり落ちた

多くの人々が焦土の中、一滴の水を求めて彷徨い続けました。水は多くの人々の命を救い、また、末期の水ともなったのです。

注釈

*12 牛田水源池 創設時からの浄水場で、現在の牛田浄水場にあたります。東区牛田新町一丁目に所在し、給水能力は11万9千m³で、市内東部地域と安芸郡府中町及び坂町に給水しています。

*13 不断水の歴史 被爆下でも断水せず給水を続けたことで、広島市水道局の象徴

的な出来事です。

- *14 みやち治美 当時、アメリカ在住の被爆2世（現在は日本に在住）、父親が「あかつき部隊」として被爆者の救援に当たり、被爆し亡くなられた。父親の体験をもとに水道の目線で詩を創作し、アメリカ国立図書館主催コンテストで編集長賞を受賞された。

第2章 戦後から現在

1 復興と拡張期（昭和から平成）

～高度経済成長と都市の発展を支える水道～

戦後の復興においては、水道をはじめ、電気や路面電車の復旧も懸命に進められました。中国配電（現・中国電力）は、8月8日に電力の供給を一部再開し、路面電車も翌9日には一部区間で運行を再開しました。



今も走り続ける被爆電車

こうした人々の努力と助け合いの精神は瓦礫の中から希望の光を灯していったのです。

また、水道においては昭和20年（1945年）から昭和25年（1950年）の間、*¹⁵戦災復興事業として水道管や水道施設の復旧を行いました。ただし、戦後は人員や資材の不足、財政難などの課題が多く、事業は容易には進みませんでした。そのため、昭和21年（1946

年) 10月1日に料金改定を実施し、以降、昭和26年(1951年)12月1日までの間に6回にわたる料金改定を通じて、財源を確保しました。

そして、戦前から計画されていた第4期拡張事業は、当初の計画に修正を加え、昭和27年(1952年)から昭和36年(1961年)9月までを計画期間とし、計画給水人口40万人とする水道の拡張・整備を行うこととなりました。

この間、広島市は飛躍的な発展を遂げていきました。とりわけ、焦土から立ち上がった広島市の復興を支えたのは、東洋工業株式会社(現・マツダ)をはじめとする製造業などの再生でした。こうした企業活動は、雇用を生み出し、街に活気を取り戻すなど、広島経済を力強く牽引していきました。また、水道は市民生活と経済成長の両輪を下支えする役割を果たしていきました。

そして、昭和30年(1955年)から、我が国は世界的にも類を見ない高度経済成長期へと突入し、広島市の街並みや人々の暮らしは大きく変化していきました。高層建築の増加や農地の宅地化による人口の急増に加え、各家庭では台所の流し台や風呂が設置されるようになりました。台所では母親が水道水で野菜を洗い、味噌汁の湯気が立ちのぼ



高度経済成長期の配水管布設工事

ります。夜になると風呂場から子どもたちの笑い声が聞こえ、家族そろって湯に浸かる時間が、ささやかな安らぎのひとつときとなっていました。この当時、洗濯機、冷蔵庫、白黒テレビが「三種の神器」として普及し、生活の質は大きく高まり、水の使用量も著しく増加していきました。まさに、人々が豊かさと平和を実感できる時代へと移り変わっていったのです。

広島市の水道は、高度経済成長期の水需要の高まりに対応するため、西部開発事業に伴う先行投資や似島



昭和42年（1967年）
似島海底送水管の布設工事

への給水工事費なども含め、昭和42年度（1967年度）から昭和46年度（1971年度）を期間とする5か年計画を立てますが、約26億円の資金不足が生じる状況となっていました。

こうしたことから、昭和43年（1968年）3月の定例市議会で、平均41.91%の料金改定案を提案しましたが、反対の声が大きく上がりました。

そして、議会は会期を延長し、各会派との調整を行った結果、4月1日に値上げ幅を29.42%とする修正案が可決されました。

しかし、この修正案では計画最終年度に約7億円の資金不足が生じると見込まれたため、値上げ幅について再議を求める異例の対応に踏み切り、最終的には

34. 56%の再修正案を可決するに至りました。

このように、水需要の増加に伴う給水体制を確立する上では、その財源の確保について厳しい対応を迫られる場面がありましたが、これ以降、利便性の向上による受益者負担の考え方が徐々に根付き、物価高騰などの社会的背景もあったことから、昭和50年（1975年）と昭和55年（1980年）の2度にわたる料金改定については、計画通りに実施されました。

こうして、昭和56年（1981年）3月までを計画期間とし、計画給水人口を83万8千人とする第5期および第6期拡張事業を実施し、^{*16}緑井浄水場や^{*17}高陽浄水場の建設によって、現在の給水体制の基礎が確立されました。

広島市の水道は、戦後の復興から高度経済成長期における水需要に対応するため、着実な発展を遂げましたが、その背景には多くの市民の理解と協力があったのです。

注釈

*15 戦災復興事業 「広島市平和記念都市計画法」が昭和24年（1949年）8月6日に公布され、戦災復興事業を基盤に、平和都市の方向を性格づける平和記念施設を中心とした緊急事業のみを5か年で完成する事業計画案が決定されました。水道については、戦災復興都市区画整理事業による街路の改廃に伴う水道管の移設、戦災で被った水道施設の復旧等を行いました。

*16 緑井浄水場 広島市の主要な浄水施設で安佐南区緑井町に所在しています。給水能力は20万m³で安佐南区、安佐北区の一部、市内西部地域に給水しています。

す。

*17 高陽浄水場 広島市の主要な浄水施設で安佐北区落合南六丁目に所在しています。給水能力は20万m³で安佐北区、安佐南区の一部、市内東部地域に給水しています。

2 安定給水への取組 ～市域の発展と渇水への対応～

広島市は、昭和55年（1980年）に政令指定都市へと移行し、新たなまちづくりの時代へと歩みを進めました。

広島市の水道も、昭和55年（1980年）4月から平成30年（2018年）6月までの長期間にわたり、計画給水人口127万6,600人とする第7期拡張事業を実施しました。

この事業では、昭和57年（1982年）の安芸水道企業団との合併や、昭和60年（1985年）の五日市町の水道事業の承継をはじめとして、広島市の発展に伴う給水区域外からの要望に対応するため、水道未整備地区への施設整備が進められました。

また、西風新都など郊外地域における新たなまちづくりの中で、住宅地や商業施設、学校、医療機関、スポーツ施設などが次々に整備され、それに併せて水道管の布設や水道施設の整備



平成期の配水管布設工事



平成 6 年大渇水
(広島県土師ダム)
【広島県提供】

が行われました。

こうした水需要の更なる増加を見越して、昭和 52 年（1977 年）以降、広島市は太田川の上流域に位置する^{*18}温井ダムの建設にも参画しました。

しかしながら、第 7 期拡張事業のさなか、平成 6 年（1994 年）に西日本を襲った記録的な渇水が広島市にも深刻な影響を与えました。

^{*19}給水制限は 7 月 19 日から始まり、太田川からの^{*20}取水制限は当初 10% でしたが、22 日には 20% へと引き上げられ、やがて^{*21}減圧給水の実施を余儀なくされました。その後も雨は降らず、30% の取水制限が迫る厳しい状況に直面しますが、市民や事業者による節水の協力、農業用水の一時的な転用などの工夫により最終的な取水制限は 27% にとどまりました。そして、ようやく 10 月 20 日に待望の雨が降り、24 日には 98 日間にも及ぶ給水制限が解除されました。

この大渇水は、水道が自然の恵みに支えられていることを再認識する機会と



平成 14 年（2002 年）完成
温井ダム

なり、平成14年（2002年）に完成した温井ダムは、人々の暮らしを支える新たな水源として、大きな備えとなりました。

蛇口から水を飲む子どもたちの笑顔、夏のプールで水しぶきをあげる歓声、スポーツ観戦を楽しむ人々の姿、こうした「当たり前」の日常の裏側には、平和であることとともに、目に見えない水道の下支えがあるのです。

注釈

*18 温井ダム 広島県安芸太田町に位置するアーチ式コンクリートダムで、平成14年（2002年）に完成しました。洪水調整、上水道の供給、発電、河川環境の維持を行う多目的ダムです。

*19 給水制限 水不足などに備えて、一時的に水の使用量や供給を制限する措置です。

*20 取水制限 水不足の際、川から汲み上げる水の量を制限することです。

*21 減圧給水 水不足の際、水の使用量を減らすため水道の水圧を下げて給水することです。

3 水道事業を取り巻く環境の変化

～頻発する災害と老朽化への対応～

水道は、まちづくりの礎ですが、広島市の水道は都市の発展とともに歩みながら、その一方で、幾度となく自然災害という脅威にさらされました。

平成26年（2014年）8月20日、集中豪雨による土砂災害（^{*22}8.20土砂災害）では、主に安佐北区

や安佐南区の住宅地が甚大な被害を受け、77名の尊い命が失われ、最大で2,662世帯が断水しました。続く、平成30年(2018年)7月の豪雨災害(*²³西日本豪雨災害)では、安佐北区や安芸区が被災し、25名の命が奪われ、最大で13,300世帯で断水が発生しました。

近年、日本各地で大規模な自然災害が頻発しています。とりわけ、令和6年の能登半島地震では、水道施設が広範囲にわたって甚大な被害を受け、石川県を中心に最大約14万世帯が断水し、復旧には長い時間を要しました。



8.20土砂災害

これらの災害では、水道管や施設が被害を受けたことにより、トイレや炊事、入浴、掃除といった日常の営みが奪われました。その中で、水が使えることのありがたさが改めて深く認識されました。また、耐震化をはじめとする災害対策の必要性が強く意識されるようになりました。水道は暮らしの根幹を支える「見えない命綱」であることを、私たちは痛感したのです。



給水タンク車による
応急給水

さらに近年では、全国各地で老朽化した水道管の破裂

事故が相次ぎ、水道の老朽化対策が十分ではないという懸念が、社会全体に広がりつつあります。

こうした状況から、広島市の水道は災害対策として、水道管や施設の耐震化をはじめ、土砂・浸水対策の推進、重要な水道管の二重化、さらには応急給水などで使用する資機材の整備など、多角的な取組を進めています。

また、老朽化対策として、おおむね50年先を見据えた「^{*24}維持保全計画」に基づき、水道管や施設の長寿命化と更新の平準化を図るとともに、財源の確保も含めて、計画的な更新を進めています。

そして今、南海トラフ巨大地震の切迫性が高まる中、これまで積み重ねてきた取組を一層加速させていく必要があります。災害はいつ、どこで起きるか分かりません。だからこそ「健全な危機感」を持ち、日常の中に備えを組み込み、さらに、計画的な老朽化対策を進めながら、将来にわたって信頼される水道の構築に向けて、歩みをとどめることなく取り組んでいきます。



高陽取水場の防水壁

注釈

- *22 8. 20土砂災害 平成26年（2014年）8月、広島市で発生した集中豪雨による土砂災害です。
- *23 西日本豪雨災害 平成30年（2018年）7月の豪雨により、西日本各地で甚大な被害を受けた災害で、広島市も大きな被害を受けました。
- *24 維持保全計画 水道施設や水道管の機能の維持と安全を確保するため、その特性や補修・補強などにより法定対応年数より長く使用する長寿命化や更新を集中させない平準化を考慮した計画で、平成26年度（2014年度）に策定しました。

第3章 「持続」に向けて ～未来へ紡ぐ水道物語～

私たちの暮らしに欠かせない水道は、今では蛇口をひねるだけで、いつでも安全な水が当たり前のように流れてきます。けれどもその「当たり前」の裏側では、水質を守るための24時間体制の監視や、安定給水を支える仕組みづくりなど、目には見えない営みが、静かに、そして絶え間なく続けられています。

時代は移り変わり、今、私たちの暮らしは新たな局面を迎えています。人口減少や節水型社会の進展により、水の使用量は減少傾向



万全な水質検査

にある一方で、老朽化した水道管や施設の更新、地震や豪雨などの自然災害への備え、さらにはこれらを担う人

材の確保といった課題が顕在化し、水道事業を持続していく上で不可欠となる資金に深刻な影響を及ぼしかねない恐れがあります。

こうした状況を受け、令和元年（2019年）10月の水道法の改正により、都道府県が中心となって水道事業の広域連携の検討が進められ、広島県では本市を含む21の市町と2年にわたって協議を重ね、それぞれが「統合による連携」か「統合以外の連携」のいずれかを選択することになりました。

そうした中、広島市の水道は、創設から今日まで市民とともに歩んできた、かけがえのない地域の財産であるという市議会の声を受けたこと、また、すでに水道の安全性・安定性と経営の健全性を確保するための経営改革に取り組んでいたことから、広島市は強い意志をもって、単独経営を維持しながら他の市町と連携する「統合以外の連携」の道を歩むこととしました。

その取組の一つが、本市の主要水源である太田川の上流域に位置する安芸太田町との連携です。水道は、水源から蛇口までが一つの水道システムであり、上流域と下流域が互いの役割を理解し合いながら、力を合わせていくことが大切です。

このため広島市は、安芸太田町に技術職員を派遣するなどの人的支援や、水質検査の受託を通じた^{*25}水平連携を展開しています。さらに、安芸太田町が持つ豊かな自然環境や地域資源を活かし、「水」を通じた新たなサービスや収益の創出を行うこととしています。こうした取



組は、自然環境の保護や上流域・下流域の人的交流にもつながるだけでなく、水道料金以外による資金確保にもなるものであり、まさに一石二鳥、三鳥となる取

組を目指しています。これからも水道事業の「持続」に向けて、従来の枠組みにとらわれない柔軟な発想による挑戦を続けていきます。

令和7年（2025年）広島市の水道は創設から127年、そして被爆から80年という節目を迎えました。水道は、私たちの暮らしに寄り添い、世代を越えて命をつなぐ地域の財産です。これからも広島市の水道は、まちづくりの礎として、「命の水」を絶え間なく送り続けるという決意を新たにし、市民とともに「ひろしま水道物語」を紡ぎ続けていきます。

注釈

*25 水平連携 水道事業の運営に関して、複数の市町村が連携することです。

参考文献

- 1 広島市水道七十年史、八十年史、百年史
- 2 広島の歴史（令和6年度版広島市勢要覧）
- 3 日本の水道事業の経験
「日本の水道の普及を支えた法制度と行政」
- 4 竹本知行（編）
「軍都広島形成 遠くて近い原爆以前の広島」
- 5 「発掘された高度経済成長期の消費生活」
「品川区/しながわデジタルアーカイブ」
「高度成長の時代へ」（国立公文書館）

音声でもお聴きになれます▶



広島市水道局

リサイクル適性[㊞]
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。